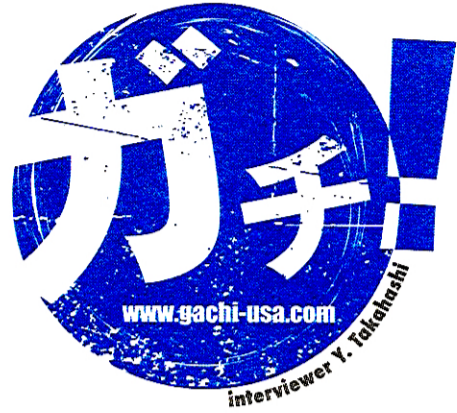


N Y州立大校内の劇場で  
狂言上演

現代に生きる狂言師、野村萬斎。人間国宝である父、万作が立ち上げた「万作の会」を意志と共に受け継ぎ、父の時代以上に海外での日本伝統芸能普及のため積極的に公演を行っている。先日にもニューヨーク州立大学ストーニーブルック校内の劇場で、万作の会による「狂言」日本の中世喜劇」を上演。多くの米国人学生から賞賛と拍手を受け取っていた。公演後、お時間を取っていただく。



発行人インタビュー  
BOUT 221

—最後は観客からカーテンコールも起こる大盛況でした。  
萬斎 非常に親日的な感じで見ていただけなのは（舞台の上からでも）伝わってききましたので、来は、ないですね。

萬斎 海外でやるのも、いつの間にか慣れましたね。まあジョークを時折織り交ぜながら（笑）あんまり堅苦しいばかりではなくて、ちょっとアメリカナイズして感じですね。  
—海外の中でもニューヨークの舞台はいかがでしょうか。他の都市と観客の反応は違いますか。  
萬斎 例えばロンドンだともっと保守的な感じ

—ささまざまな文化を受け入れやすい土壌である、と。  
萬斎 でもね、寛容であるが故に、そこで一定の評価を得るのは厳しい街ともいえると思います。淘汰（とうた）される可能性もある。それも含めて、やっぱり、文



狂言師  
野村萬斎に聞く

野村 萬斎（のむら まんざい） 職業：狂言師  
1966年生。野村万作の長男。祖父故6世野村万蔵及び父に師事。重要無形文化財総合指定者。東京芸術大学音楽学部卒業。「狂言ござる乃座」主宰。国内外の狂言・能公演はもとより、現代劇や映画の主演。古典の技法を駆使した作品の演出、NHK「にほんごであそぼ」に出演するなど幅広く活躍。現代に生きる狂言師として、あらゆる活動を通し狂言の在り方を問うている。94年に文化庁芸術家在外研修制度により渡英。芸術祭新人賞・優秀賞、芸術選奨文部科学大臣新人賞、朝日舞台芸術賞、紀伊國屋演劇賞を受賞。世田谷パブリックシアター芸術監督。公式サイト：mansaku.co.jp/

「型」を見せるためではなく「人間」を描きたい



萬斎 表現の深さ、だと思えます。僕たちは「型」を演じているわけですが、その「型」に匹敵する中身がないと意味がなくなります。「心情」であったり「肌」であったり、その「型」の中のモノ。その両輪の輪で進んでいかないと、形だけのものになってしまう。そうなる、特にこちらの方はつまらないと感じるでしょうね。「型」を見せつつも、僕たちはその「型」の中身の「何か」を（同時に）見せたいというつもりでいるわけです。

萬斎 それは、やっぱり古典芸能というものの力試し、ですね。他のジャンルと拮抗（きっこう）しないで、負けているとお客さんは来ないですから。国や文化は違えど「いいものはいんだ」ということを証明したいのかもしれない。例えば、少し前までは海外で評価されると自国（日本）での評価につながった時期もあったと思うんです。特に高度成長期は、日本がどんどん西洋化されて古典的な物が忘れられていた。その時期に、父たちが海外に行って評価され、また日本に帰って再評価される。そういう時期があったと思うんです。そういう意味でも他ジャンルの芸術と並べて、自分たちの水準がどこにあるかということは常に意識する必要があります。海外公演をするということはそういうことではないでしょうかね。

—そう考えると650年前に確立した狂言というものが現代のニューヨークの学生にも受け入れられた。まさに「いいもの」が時代や国を超えた証明でもあるということか。  
萬斎 ありがたいことです。



萬斎 物量主義的な力とエネルギーで勝負するアメリカとはちよつと違うけれども（笑）そのあたりもアメリカの皆さんに見てもらえたらな、と思います。

—最後にニューヨークで頑張る日本人の読者にメッセージをお願いします。  
萬斎 この街は、きつとね、何か「本質的な物」を極めれば芽の出る世界だと思います。認めてくれる人が必ずいる街な気がしますね。まあ、でも寒過ぎて住みやすいかどうかはちよつと微妙ですが（笑）。でも、まあ頑張りますよ！ つてことです。

萬斎 万作の会主宰者・野村萬斎さん（左）と、ストーニーブルック大学舞台芸術学科教授、声沢いづみ氏によるトークが行われ、学生らからの質問に答えるなど、交流の場が持たれた。